

第3部 理 論 篇

女性の職業的同一性の変容に関する予備的検討 — 職業選択と将来の就労の意向から —

(研究担当) 國眼真理子

目 次

1. はじめに	119
2. 女子学生の職業選択とライフ・プラン	119
①短大女子学生の場合	119
②四年制大学在学の女子学生の場合	124
3. 中断後再就職した中高年女性の面接調査より	130
4. 職業意識に関する教育の必要性	133
5. 今後の課題	134

1. はじめに

自分の能力や興味に合致した仕事とは何か、自分が本当にやりたいことは何なのかと、職業を考えることを通じて、自分とは何者で、どのように生きていこうとしているのか自らのアイデンティティを問うことは、青年期に課せられた重要なテーマのひとつである。男性に比べ、女性の職業生活は蛇行したり枝分かれしたりと、その流れは一様ではないが、自己同一性の確立の要因として職業領域が大切なことは同様である。保守化傾向が指摘される反面、とんでいけるキャリア女性もてはやされあこがれの対象にされるなど多様化の様相をみせている今の女子学生らが、実際に就職を前にして、将来をどのように展望して職業生活に入ろうしているのか、職業を選択した時期やその影響を与えたものは何か等を、卒業を間近に控えた短大二年生と、教職課程を選修する四年制大学二・三年生に尋ねたのが以下の調査である。中断後再就職した中高年女性との面接調査の結果も踏まえて、女性の職業的同一性の変容を探索的に検討することを目的とする。

2. 女子学生の職業選択とライフ・プラン①短大女子学生の場合

調査を実施したのは、理系の実務型の学科から成る共学の短期大学二年に在籍する女子学生21名で、大半の者がすでに就職先が内定している。大学の性格上、職業志向が強く、いわゆる人文系家政系の短大とは性格を異にする。調査は、以下の質問に対して自由に記述する方法をとる。

「あなたは大学卒業後、どんな仕事をどのようにしていきたいか、10年後を展望して述べなさい。また、あなたがその仕事を選んだのはいつ頃で、影響を受けた人は誰れでしょうか。」

結果は表①に示す通りである。

a. 将来の就労に関する意向

この大学の性格に由来するものと考えられるが、「結婚・出産にかかわらず働きたい」とする人の割合が高い。生命保険文化センターの「女性の生活の現在と将来」調査では、35才未満の女性（学生を除く）のデータで「結婚・出産にかかわらず働きたい」継続型は16.9%であるから、実際に就業していない

表 1 将来の就労に関する意向 (N=21)

1. 結婚ないし出産まで働く	28.8 (%)
2. 結婚ないし出産で退職、子どもが大きくなったら再就職	14.4
3. 結婚・出産にかかわらず働き続けたい	33.6
4. どちらとも決めかねる	9.6
5. 将来の就労に関して「無記入」	14.4

a. 将来の就労に関する意向

この大学の性格に由来するものと考えられるが、「結婚・出産にかかわらず働きたい」とする人の割合が高い。生命保険文化センターの「女性の生活の現在と将来」調査では、35才未満の女性（学生を除く）のデータで「結婚・出産にかかわらず働き続けたい」継続型は16.9%であるから、実際に就業していないことを差し引いても高い割合であろう。反面で、他調査では多い中断型が少なく、結婚・出産で退職か、ないしは継続型と二極化の様相を示した。この辺、標本数が極めて少ないため、偶然的な要因が強く作用した可能性もある。

次に将来の就労に関する意向（タイプ1～3）別に、記述内容を検討した。なお典型的なものを記述例としてあげた。

「結婚・出産で退職」型の記述例

例 1.

卒業したら2年間で学んだところを生かせる仕事をしたい。この10年間の間に結婚したいが、夫になる人が仕事を止めて欲しいと言えはやめようと思っているが、もしこれからする仕事がやりがいがあって楽しいものになっていれば、続けるかもしれない。でも子どもが出来たら必ず仕事を止めようと思う。子どもにとって親がいなければならぬ時期があると思う。そんな時一緒にいてあげられないとなると、子どもの人格形成上影響がでてくると思う。

例 2.

結婚しても仕事は続ける。その頃は仕事にも慣れて楽しい時期だと思うので。しかし子どもができたら仕事は止める。私は責任をもって仕事をしたいので、子育てとの両立はできそうもない。

当然のことながら、「結婚ないし出産で退職」型は、職業人としての自分と、母親としての自分の両立は困難だと認め、母親としての自分を優先させている。記述例からわかるように、たとえ仕事がやりがいのあるものであっても、楽しいものであったとしても、あっさり子どものためと仕事を断念している。その理由は、責任をもって仕事を遂行できないから、子どものそばに居てやれないからであるが、いずれも子どもを育てることは女である母親の仕事、子どもを育てることにまさる天職はないという性別役割分業を肯定した立場に立っているといえる。

「結婚・出産で退職後、子どもが大きくなったら再就職」型の記述例

例 3.

電子関係の仕事に就く。結婚後も働きたいが、子育ての時期は、子どものそばに居てあげたい。女として、母として、一番大事な事は、子どもの教育だと思うので、出産まで働く。子どもがある程度大きくなったら、家で出来るような仕事をしたい。例えば、ソフトを作る仕事、またはワープロを使うことなど」

例 4.

化学関係の仕事に就く。自分の力で研究が出来るように勉強を続け、その道のプロになりたい。結婚は27才程度で、子どもが小学生になるまでは一緒にいるが、その後仕事を続けたい。その仕事は、前と同じ仕事でなくてもよい。ただ楽しめない仕事は絶対やりたくない。

この点では、中断再就職型もほぼ同様である。

中断再就職型の記述例に明らかなように、子どもが小さいうちはそばに居てあげたい。そのためには懸命に勉強してえたキャリアを棒に振ってもと考えている。但し、子どもから手が離れたら、コンピュータ・ソフトの作成のような創造的な仕事や楽しめる仕事（この意味は定かではないが、要するにやりがいのある仕事だと思われる）を求めたいというわけである。いずれのタイプ（タイプ1、2）も、自分が働きたいかどうか、自分にやりたいことがあるかどうかよりも、「女性は、～すべきだから」、「女性として、女性ならば～することが望ましい」という性別分業意識が先行して、職業プランが組み立てられている。自ら好き好んで育児や家事を選びとり決断した場合には問題は少ないが、「女性なら～すべきだから」に縛られて仕事をあきらめた場合、タイプとしては同じ中断型であっても、外的要因による後者の場合は、子育て期間中の社会からの隔絶感、焦燥感は強いものになることが予期される。また、中断型の場合、出産から末子小学校入学までを10年間としても、余程準備してかからねば、今ライフステージ第Ⅲ期を迎えなおかつ就労を希望している女性たちが直面している悩みと同じ悩みを背負うことになるであろう。すなわち、中断型の女性の就労は、小売業・サービス業・事務を中心としたパートタイマーで、働きがいと結びつきにくい単純労働が多いのが現実だからである。例3のように家庭でも出来る仕事すなわち在宅勤務も、仕事と家庭の両立が可能であるかのように思われるが、生活時間上の区別をつけ難く、子どもの面倒も中途半端、仕事は不満足と、二兎追う者一兎も得ずになりがちである。このような中断後の再就労の状況を、知識として知っているか、知らぬままかとは自ずと、中断前の就労のあり方も変わってくるであろう。

「結婚・出産にかかわらず働き続けたい」継続型の記述例

例5.

製薬会社に内定したので、新薬の開発や薬効に関する研究をしていきたい。もし結婚をしても続けたいし、子どもが生まれても続けたい。自分の望み通りの仕事であるから、家事一般のことは大変だと思うが、研究を続けたいと思う。

例6.

卒業したら、設計事務所で仕事をしながら勉強をし、周りの環境も考えた都市計画的な設計をしたい。今は結婚願望はないが、もし結婚したとしても、仕事は続けるだろう。

一方、本調査で最も多かったのが、継続型である。この型を選択した者に共通していえるのは、やりたい仕事のイメージが、「結婚・出産退職」型や中断型にくらべて明らかなことである。無論実際にはまだ仕事にタッチしていないのであるから、波乱も予想されるが、何をやりたいのかその方向づけがあるだけに、葛藤状態に陥ったとしても、解決をめざす方途が開けやすいと思われる。

なお、この調査の終わりに、現在の選択の確信度を問うために、「もし、もう一度人生をやり直しできるとしたら、あなたはどうか」を尋ねた。継続型にかなり確信に満ちた明確なイメージを描く者が多かったので、継続型の女性は、やり直すとしても、また同じ選択をすると答える者が多いと想定していたが、かならずしも将来の就労の意向のタイプとの関連はみられなかった。かえって「結婚・出産退職」型に、「他の職業を選ぶことはないと思う」、「同じ仕事を選びたい」とする者がやや多く、すでに職業的アイデンティティ達成の地位にあると考えられる。確信をもってこれがいいと選択した仕事であるにもかかわらず比較的短期間で仕事をあきらめるのは何故か今後、面接調査その他で検討していく必要がある。

b. 仕事を選んだ時期

仕事を選んだ時期で最も多かったのは、高校二、三年の項であった。方向づけを得た者も含め、高校生時代に職業を決定した者は、38.4%であった。高校期に何らかの職業意識に関する教育が必要なが示唆される。また、表2に明らかかなように、進学を契機として職業がしぼられてきている様子が、卒業年次を職業選択の時期としてあげている者が多いことからわかる。

表2 仕事を選んだ時期

1. 中学校のころ	4.8 (%)
2. 中学2年ごろ	4.8
3. 中学3年ごろ	14.4
4. 高校1年ごろ	4.8
5. 高校2年ごろ	33.6
6. 浪人中	4.8
7. この学校に入ることを決めたとき	9.6
8. 大学一年のころ	4.8
9. つい最近のこと	19.2

c. 影響をうけた人

最も多くあげられたのが、「先生（小・中・高含めて）」と「特になし」（各19.2%）で、後は「マスコミ（テレビ・新聞・雑誌）の影響」（14.4%）がこれに続く。教師の影響力の減退がしばしば指摘されるが、進路決定についてはかならずしもそうとは言い切れぬようである。

②四年制大学に在学する女子学生の場合

人文系学科専攻者が多い共学校で教職課程を選修する二・三年次の女子学生が調査対象である。年齢的には、先の短大生とほとんど同一である。調査は二段階に分けて実施された。

まず、はじめに大学に進学した目的と卒業後のライフ・プランを問い（N=30）、次にこのうち13名の女性に、さらに詳しく卒業後の就労の意向や本人の母親の就労経験を尋ねた。

a. 大学進学目的

表3に明らかのように、「資格をとりたい」が26.3%と最も多く、大学4年間で「就職するための準備期間としたい」とする者（7.9%）と合わせ、大学生活

表3 大学進学のための目的（複数回答） N=30

1. 興味ある事柄を更に深めたい	10人	26.3%
2. 自分の将来を考える時間がほしい	4	10.5
3. 資格をとりたい（教師、学芸員など）	10	26.3
4. 自分自身をみつめたい	2	5.3
5. 専門的な知識や教養を身につけるため	3	7.9
6. 就職するための準備期間としたいから	3	7.9
7. その他	6	15.8

を就職のためのステップと考える就職準備型は3割強であった。

一方、「興味ある事柄をさらに深めたい」および「専門的な知識や教養を身につける」を合わせた知識・教養重視型も全く同率で、就職準備型と知識・教養型に二分される。

表4 卒業後のライフ・プラン（イメージされている時期）

1. 卒業後のプランは未定あるいは、考えていない	5人	16.7%
2. 就職まで	16	53.3
3. 結婚ないし出産まで	1	3.3
4. 子育て期	1	3.3
5. 退職まで（一生涯にわたる）	3	10.0
6. あいまい	4	13.3

b. 卒業後のライフ・プラン

教職課程を選修している学生なので、一般学生に比べ、教員や学芸員になりたいというように、職業志向ははっきりしている。しかし、大学二・三年生という就職までにはまだ時間的ゆとりがある学生だけに、先の同年齢の短大生の

場合とは大分様相を異にする。卒業後のプランは未定もしくは考えていないとする者、考えてもせいぜいどの方面の職業につきたいのかまでしか言及していない者が多く、ライフ・プランは極めて短期間なものしか考慮されていない。いかなる就労形態で人生を歩もうとしているのかは不明な者が大多数である。今のところは、何を職業としたらよいか模索しているか、もしくはいくつか候補があるが決められない状態にある、あるいは自分の興味は決まっているがそれと合致するような職業を見い出しえていない状態にある者が多いといえる。自らの職業生活を長い目で見通すところまでいっていないのが実情である。マーシア (J.E.Macia) の同一性地位の類型化に従えば、職業的アイデンティティは、モラトリアムと同一性拡散、同一性達成に三分され、早期完了の者は少ない。職業選択は青年期の課題であり、同時に、自己同一性形成の重要な要因のひとつである。まさに職業を意識することによって、自らの興味や能力は？、自分は何者か、どのように生きるのかとアイデンティティを問い直し、さまざまな役割実験を大学生活の中でくり返し、ひとつの方向を見い出していかうとしている姿が浮き彫りにされた。以下に典型的なものを記述例としてあげる。

例7 (モラトリアム)

大学に進学してから生きるための目的をみつようと思った。最近ようやく自分の進みたい方向が見えはじめてきた気がする。卒業後はソーシャル・ワーカーか教師になって、人間を相手にした職につきたいと思う。どちらも厳しい試験をクリアしてからの話なので現在はそれに向けての準備期間である。

例8 (同一性達成)

高校のときはマスコミ関係に進もうと思ったが、今は教師になりたい。卒業後は田舎に帰って教職につきたい。

例9（職業的同一性拡散）

卒業後のライフ・プランは特に定まっていない。これとってやりたいが見当らなくて、私としては寂しいような気がする。さしあたってはどこかに就職して、結婚は遅くてもよいから、良い人をめぐり逢うのが目標といえば目標。結婚したら、仕事はやめて趣味の世界に生きたい。

先の短大では、職業的アイデンティティ獲得に向けて、大方の者が達成状況にあったのとは好対照であった。

次に重ねて、13名の女性に卒業後の就労の意向や本人の母親の就労経験を尋ねた。質問項目は以下の通りである。

①大学卒業後どんな仕事をしたいか。その職業を選択した時期や職業選択に当り影響を与えた人の有無。

②次のライフ・スタイルのうちどれを選択したいか。その理由は何か。

I) 結婚まで就労、II) 出産まで就労、III) 出産で一時中断するが、子育てが一段落したらパートタイム就労、IV) 出産で一時中断するが、子育てが一段落したらフルタイム就労、V) 定年まで仕事を継続する

③あなたのお母さんは、あなたにどのような生き方を望んでいるでしょうか。また、あなたの理想の母親像はいかなるものでしょうか。

④あなたのお母さんは、これまで家事以外の仕事をして収入を得た経験がありますか。あるとしたら、あなたがいくつ位の時（から）でしょうか。

c. 職業領域における同一性地位

重ねて調査を行なった13名の女子学生の職業領域における同一性地位を、中西信男ら（1982）の自己評定尺度を参考に判定した。結果は、同一性達成が6人、モラトリウムが5人、同一性拡散が2人で、早期完了と判断できる者はいなかった。

前回の調査と合わせ考えると、四年制大学の場合、大学2・3年では将来の職業をいくつかの曲折の後決定し、今その達成に努力している者は半数に満たないことがわかる。職業を決定しようと努力し、ある程度の方角づけは得ているもののまだひとつにしぼり切れていないモラトリウム状況の者や今はまだ職業

について考える時ではない、職業を決めるために大学に来たわけではないとする職業的同一性が拡散状況にある者の方が大勢を占めている。

d.「職業的同一性地位」と、「将来の就労に関する意向」および「本人の母親の就労」との関係

この三者の関係をまとめたのが、表⑤である。この表からわかることは、職業同一性地位と将来の就労の意向とは、限らずしも明確な関係はない。同一性達成の地位にいるものの就労意向は、さまざまに特に傾向性をもたない。但し、モラトリアムの地位にいるものは、「定年まで」ないし「中断後フルタイム」を選択している。

表5 同一性地位、将来の就労意向および母親の就労の関係

同一性地位	将来の就労の意向	母親の就労
達成 (6名)	結婚で退職 中断後フルタイム 定年まで(教員なら)、 中断(会社員なら) 定年まで(但し、中断の可能性もあり) 定年まで 結婚や出産で退職(恋愛婚ならば) 定年まで(見合い婚ならば)	就労(現在まで) 小学校入学まで就労、以後無職 無職 <u>就 労</u> <u>パート就労(高2、3年以後)</u> <u>内職のパート就労</u>
モラトリアム (5名)	定年まで 定年まで 中断後フルタイム 中断後フルタイム 中断後フルタイムのパートタイム	<u>就労(小3より)(受容)</u> <u>パート就労</u> 無職 無職 無職
拡散 (2名)	結婚で退職 中断後パートタイム	? 就労(非受容)

「将来の就労の意向」と「母親の就労」の関連をみると、青年期以降母親が就労している者は、本人自身も「定年まで」就労したいと考える率が高い。今現

在母親が働いている者7名のうち5名までが、選択したあるいは選択しようとしている職業を、できる限り定年まで勤め続けたいと考えている。母親が就労しているにもかかわらず、本人が「定年まで」を選択しなかった2名のうち、1名は現在母親が経済上やむなく働いている状況にあり、もう1名は母親の就労を容れできぬままにいる者である。青年期以降、母親が働く姿を見ることは、娘の将来の就労に大いに影響しているとみてよいであろう。

また全般的に、「定年まで」もしくは「出産で中断した後フルタイム」を選択する者が多く、四年制大学生の場合、職業を継続する意志が強い者が多いと言える。出産後中断を余儀なくされても、中断後は世間一般の動向と趣きを異にしてパートタイム就労よりはフルタイム就労志向が強いことにもその一端がうかがえる。

短大生と四年制大学とでは、質問事項に若干のずれがあるので、直ちに比較ことはできないが、二つの調査からは次のような点が推察できる。

- ・ 職業の決定を志向しつつもまだ決定しかねているモラトリアム状況では、性別分業意識は余り意識されないが、職業的同一性を達成し遂行する段階に近づくと、性別分業意識が意識化され、将来の就労の意向に影響を及ぼす可能性がある。

これは、短大・四年制大学共、在学中は殊更性差を感じずに、自らの職業的同一性の模索が可能であるが、職業の決定、就職先の決定となると、女としての自分に否応なく直面させられることと関連があると思われる。

- ・ 女性の職業的同一性の達成や遂行には、性同一性の要因が関与してくると思われる。

職業的同一性は達成しても、ライフ・プランとなると、結婚という不確定要素の影響が大きく、決められない傾向があり、「女性の人生は結婚で大きく変わってしまうのだから、今から考えても仕方ない」という諦念がある。職業同一性地位が達成状況にある女性が、「恋愛結婚だったら、結婚もしくは出産で退職するか、見合い結婚だったら定年まで勤める」と記述した例が見受けられたが、将来の就労の意向には、結婚に対する構えが大きく作用する。

3. 中断後再就職した中高年女性の面接調査より

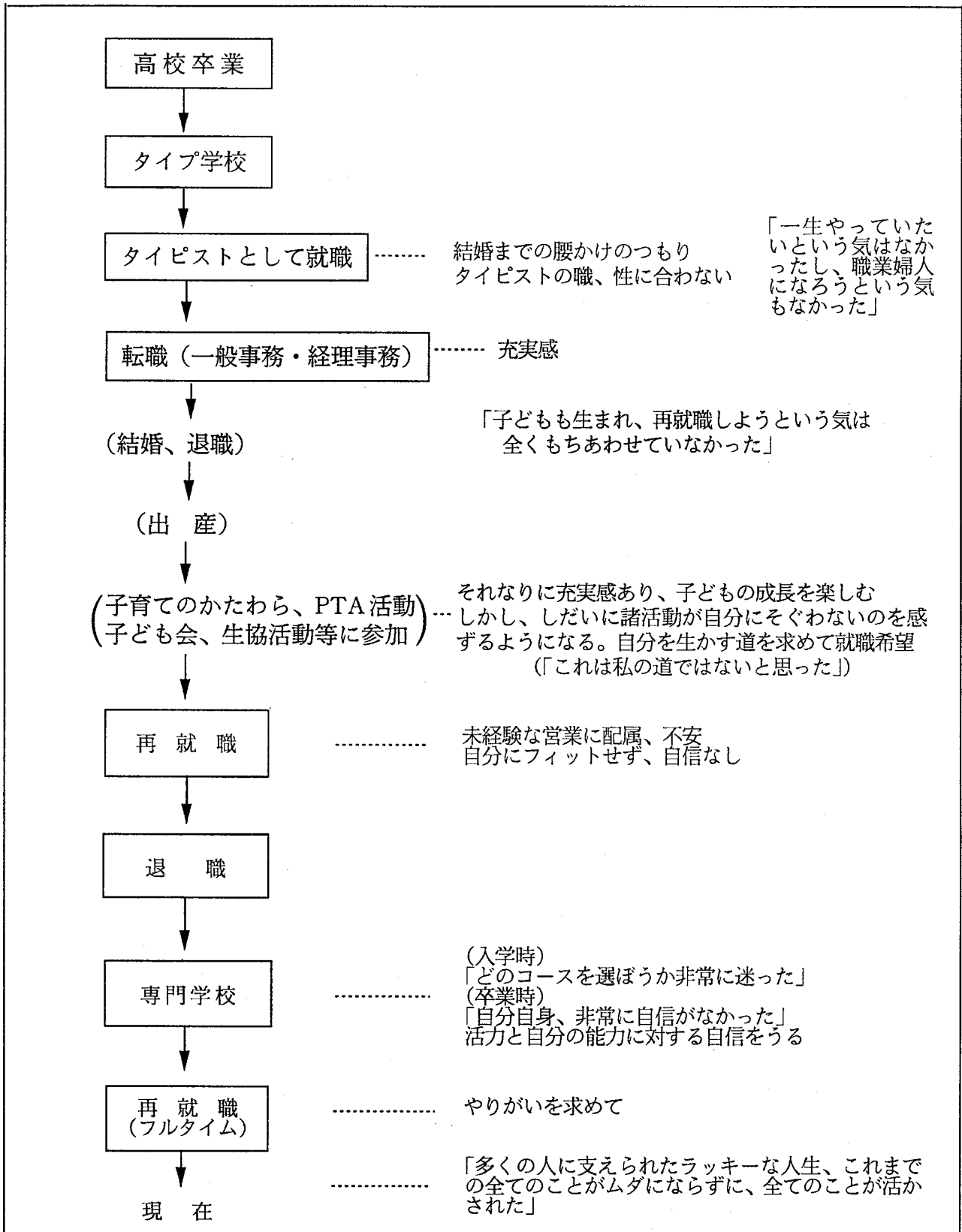
結婚ないしは出産で退職後、何年間かの中断期間を経て再就職した女性3名の面接調査の結果である。いずれも再就職後10年～18年を経過したフルタイム就労の女性たちである。一名は、中断期間5年を経たのち、家庭の事情から経済的自立を余儀なくされたケースで、再就職時には乳幼児の子ども3人をもつ母であった。もう一名は、結婚当初より子育て期間として10年経過した時点で再就職したいという意向をもち、当初の予定通り家計の補助を目的として再就職に踏みきったケースである。再就職当時4才と7才の二児の母親であった。第三のケースは、出産で中断した後、子育てが一段落した時期（小4と中1）にフルタイム就労に踏み切ったが挫折、思い直して専門学校へ入学、再学習後、再就職を果たし現在は管理職として勤務する女性である。

これら三名の女性のうち前二者は、経済的自立や家計補助という明確な目的意識があるケースなのに対し、後者は再就職に際し、生きがいや働きがいの得られる仕事を求めたという点で、現在の第Ⅲ期女性の意向とりわけ高学歴女性の再就職志向に通ずる点があり、本稿では、このケースについて検討を加わえた。

uさんのこれまでの経歴を振り返ってみると、結婚前の職業生活は、恐らく当時の女性の大半が抱いていた職業観、すなわち「仕事は結婚までの腰かけ、今の仕事を一生続けようとは思わない」に支えられていた。タイピスト学校を卒業しタイピストをやってみたもののどうも自分には合わないことから転職を経験している。結婚の時点では、子育てが一段落したら仕事をもとうという計画はなかったという。uさんの場合、結婚前の職業生活において、人並以上に挑戦的に充実感をもって仕事をすると共に資格の取得にも意欲的であった様子がうかがえるが結婚退職するときには将来の就労の意向はなかったのである。この点では職業的同一性そのものは達成しいても、結婚故に、将来を見通せない現代の女子学生と同様である。

しかしその後のuさんは、極めて意欲的に諸活動に取り組み、責任ある組織の上層部を経験して、意図せずして豊かなネットワークの形成と人の話を聞く、まとめるといった職業能力のひとつとして不可欠な能力をはぐくんでいる。日本

図. uさんの職業経験と生活感情



経済新聞社の調査（1988）によれば、高学歴女性ほど再就職希望の理由として、経済性よりもまず「人間関係を広げたい」、「自分の能力を生かしたい」を掲げている。uさんの場合、後年ふり返ってみると、この時期の活動もまた、ひとつの職業前教育となっていたようである。職業につくことによってのみ人間関係の広がりや自分の能力を生かすことを求めるのではなく、それ以前から素地として周りの社会と深くかかわっていかこうとする構えが必要なことを示唆している。

諸活動に参加し続けていくうちに、どうも活動している自分が、本来の自分にそぐわないのを感じたuさんはここで自分を生かす道として職業を選択した。主婦としての自分、母親としての自分、あるいは活動に参加している自分が、自分らしくないと感じ始めたのである。自ら期待される役割の変化を感じとり、安定からモラトリアム状況へと変わっている。自分らしさを求めて模索する過程で、uさんは一度再就職、しかし会社で期待される職業能力と自らの興味・関心・能力がフィットせず、また自信もなく不安を感じたとき、自らに職業準備教育で課した。結婚前に取得した資格に関連した経理をもう一度学習し、それによって自らの職業能力に自信をとり戻したのである。また学校生活の中では年齢差を越えて、ここでも友だちや教師とのネットワーク作りを欠かさなかった。このあたりはuさん自身の天性とも言えるのかもしれない。この学校生活を通じて、再び職業的同一性を達成し、自らのやりたい仕事、職業が明らかになっていった。この自信をバネとして、もし生きがいのあるフルタイムの仕事があれば就職したい、もしなければ税理士試験をめざし学習するという。大変に挑戦的意欲的な変身振りである。中断後再就職を希望する女性にとってネックになるのが、準備不足ゆえの働きがいのある職場を得がたい点である。子育てが一段落する30代後半以降の女性が再就職を考えると、ネックとなるのは実は年齢制限でも職種 of 狭さでもなく、職業能力の減退だといってよいであろう。再就職にあたって、職業的意識に関する教育と実務的な職業教育双方の必要性をuさんの事例から痛感する。

一度達成された職業的同一性も、自分に期待される役割の変遷と共に、揺れ動く。uさんの場合も一度モラトリアム状況に移行したが、その後再び同一性を

達成し現在に至っている。達成と揺り戻しのくり返しがことに女性の職業的同一性の場合には、大きいと思われる。

この面接調査を通じて感じたのは、女子学生に見られた、性同一性の混乱や性別役割分業へのとらわれがほとんどみられなかったことである。「女性だから～すべき」的発想にとらわれずに、「自分がやりたいことは何か」をまず先行させて、職業プランを組み立てている。男女の違いは認識しつつ、女性にしか出来ないこと、自分でなければ出来ないことは何かという自らの独自性を前面に出す発想である。ネットワーク作りの巧みさと合わせ、女性の職業的同一性の達成や遂行に関して教えられるところが多かった。

4. 職業意識に関する教育の必要性

女性の職業生活は、男性の場合と異なり単線型ではない。定年まで継続希望型は男性と同様、同一の職種についてキャリアを重ねていくことになるが、中断再就職型を、家庭と仕事の両立上望ましい就労形態として選択することの多い女性の場合、職業的同一性達成に向けての助言と共に、自らの職業生活についてのライフ・プラン作りが可能となるような職業意識の形成を助ける職業教育が必要だと思われる。

母親が職業をもつことは、本当に子どもとのふれ合いを欠くことに通じてしまうのだろうか。外に働きに出るイコール子どもに手をかけられないのだろうか。子どもに手をかけるとはいかなることで、手をかけられないことは即愛情の足りない証もしくは非行の温床なのだろうか。これから職業生活をはじめようとする女子学生らが、自らの職業プランを考える上で、非常に単純に図式化された性別役割分業を自分なりに消化せずに、そのまま鵜呑みにしている様子が調査のデータ中に散見された。働くことが良いか悪いかという二律背反な見方でなしに、男性は外で働き、女性は家庭という性別役割分業を意識をすだけでも、自らの就労の意味を多面的に把えることを可能にするだろう。

性別分業の見直しと共に欠くことができないのが就労目的の明確化である。「自分は何で働くのか」、「自分は何がしたいのか」、「どのように働きたいのか」と

いう職業的同一性への問いかけが必要であろう。これは未婚であろうと既婚であろうと、働く目的があいまいであると家庭へ回帰してしまいがちな女性の場合、ことに大切であろう。

またすでに述べたごとく中断再就職型を望む女性が多いという現実を踏まえ、中断型を希望するならば2~3年のキャリアでは不十分であること、中断前に中断後を見通したキャリアを積むこと、中断期間中のフォロー・アップや再開直前の職業訓練を自らに課すことが必要であるという認識を伝える必要もあろう。第Ⅲ期を迎える以前からの準備が、再就職を実りあるものにしてくれるからである。

5. 今後の課題

本稿は、女性の職業的達成を助けるためにはどこに着目すべきなのか、職業的同一性の形成プロセスや変化のプロセスはいかなるものかを知るための予備的検討である。今後、学卒後就業している中断前の女性および中断期間にいる女性、すでに再就職している女性に対して、どのような経緯で職業を選び就業先を決定してきたのか、就労目的、性別分業意識、家庭と仕事との両立、結婚について面接を重ねていきたい。自らの仕事は何なのか、職業選択に対してどのようにかかわってきて、これからどのようにかかわろうとしているのかを明らかにすることによって当初の問題であるライフ・ステージⅡ期の子育て期における焦燥感や社会からの隔絶感の解明にも迫れるものと考えらる。

(参考文献)

- 「女性は自立する」伊藤雅子、若林満編著 福村出版 1985
「アイデンティティの心理」中西信男他著 有斐閣 1985
「幼児期と社会1、2」E.H.エリクソン みすず書房 1980
「母親の就業と家庭生活の変動」原ひろこ編 弘文堂 1988